

秋庭裕・川端亮 著『霊能のリアリティへ  
—社会学，真如苑に入る—』  
新曜社，2004年6月刊，345頁，4300円

塚田 穂高

本書は、関西を中心に活躍し、「宗教社会学の会」編の著作等への論文執筆も多い気鋭の社会学者である、秋庭裕・川端亮の両氏（以下、著者）が、共著として世に初めて問うた単行本である。

本書は、著者が1990年以来継続してきた、宗教法人「真如苑」への調査をもとに、まとめられたものである。

本書の研究対象である真如苑は、伊藤真乗・友司夫妻が1936年（1951年に現在の名称）に東京都立川市で創始した、大般涅槃経を教典とする「密教系の仏教教団」（本書p.1，以下、本書からの引用はページ数のみ示す）である。その特徴として、大乘・歓喜・大歓喜・霊能の4段階がある「真如霊能」と、霊能者を鏡として自分を見つめなおす修行の「接心」があげられる。公称信者数は、86万467人（2002年12月末）である。また霊能者数は、1873人（2003年10月）である。

本書の目的としては、「真如苑の霊能者と、その広範な活動を「社会学」的に描き出すこと」（p.i）、「どのようにして霊能者が誕生するようになっていった」（p.3）のかを明らかにすること、が挙げられている。また本書は、「宗教を、ことばによってどれだけ描くことができ」（p.i）、「社会学者に、さらには社会学を専門としない一般の読者に、宗教をどれだけ理解してもらえるか」（pp.i-ii）という試みであるとする。この問題意識は本書全体を貫いているといえよう。

本書の構成は以下の通りである。

はじめに

第1章 方法論ノート

- 1 真如苑の概要
- 2 研究史の概括
- 3 内在的理解の方法論的検討
- 4 「濃密」で「開かれた」記述

第2章 教えの創成

- 1 伊藤文明
- 2 内田友司
- 3 立照閣と立川不動尊教会
- 4 智文と抜苦代受
- 5 まこと基礎行
- 6 法難
- 7 真導院友一
- 8 霊言発露
- 9 大般涅槃経
- 10 釈迦涅槃像と接心道場
- 11 霊位と相承会座
- 12 霊劇
- 13 霊能発動
- 14 真如霊界
- 15 目黒道場と関西本部
- 16 発祥精舎円満莊嚴
- 17 摂受院遷化
- 18 霊祖摂受院

第3章 霊能者とネットワークの計量的分析

- 1 霊能者のプロフィール
- 2 発展の準備期間としての70年代
- 3 導きのネットワークの拡がり

第4章 霊能の計量テキスト分析

- 1 信仰の中のことば 2 霊位向上のデータ化 3 霊位向上の取り組み
- 4 霊能の構造 I 5 霊能の構造 II 6 計量的分析による霊能の理解
- 第5章 霊位向上の物語
  - 1 インタビューのデータ化 2 ライフヒストリーのマップ化 3 物語としての宗教
  - 4 物語としての救い
- おわりに
  - 1 霊能の社会学的理解 2 霊能と教団の発展

では、評者なりに本書の概要を記そう。

「はじめに」(pp. i-iii)では、まず前述したような本書の目的が簡潔に述べられる。そして、本書においては、真如苑の理解のみにとどまらず、現代日本社会に遍在する「基層的、伝統的、文化的社会意識の一面を垣間見ること」(p.iii)の可能性までが射程に入れられている。

第1章(pp.1-35)では、まず教団の説明や刊行物に基き、真如苑の概要が述べられている。

次に、研究史の概括が行われる。各先行研究から、どのような問題点が析出され、それを本書でどのように扱うのかが述べられている。特に、どのようなプロセスを経て、「生の」体験が「体験談」へと醸成されるのかと、それによって何が達成されるのかという問いに対しては、本書において全面的な返答をしていくと述べられている。

続いて、方法論としての内在的理解の検討がなされる。まず、データの収集方法という観点から、「内在的理解」はライフヒストリー法によるもの、「体験の身体的理解」は参与観察法に基づくものであり、それらに加えて、調査票によって集められたデータを解析する「統計的理解」があげられている。次に、対象を理解するという点から、「内在的理解」は、「自己中心的準拠システム」で「虫瞰図的」な「水平の視点」(p.25)であり、世界全体が見えないが、一方で、「統計的手法(≒理解)」は、標準化された「地図を描こうとする」、「垂直の視点」(p.27)だと述べられる。そして、両者を統合した「鳥瞰する視点」として、「私たちの生きている社会と宗教世界を類似したものにとらえる」**「モデル」**(p.28)の必要性が説かれる。そこにおいて、「内在的理解」は理解の共通基盤≒モデルとしての**「民俗信仰心」**を「発見」したと評価している。そして最後に、本書では**「モデルとなるものを意識的に探し求めている」**(p.29)ことが述べられる。

その後、記述における方法論的な工夫について論じられる。その工夫とは、宗教的な教えの内在的な理解の試みだという。その際の研究者の課題は、「教えの「外へ」、その(信者の)リアリティをいわば**「翻訳」**しようとする事」(p.30)だとされる。そのために、「種々の読者の「読み」に耐える(=「濃密な」)記述」(pp.31-32)、「多声的・多層的な(=「開かれた」)テキスト」(p.33)が目指されるべきだと指摘されている。

第2章(pp.37-164)では、「教えの創成」と題して、主に1967年の伊藤友司の死までの、教団の歴史・展開・教えの形成過程が、トピック毎に整理される。本書で最大の約130頁が費やされている。その記述は、「**「文体」**を創出する」(p.30)ための工夫がなされたもので、モデルやメタファーやアナロジーを用いることで、「**「教えを内側から語る、教徒のリアリティ」**」(p.ii)への近似度を高める試みであるという。

一部だけ触れると、2節では、真如苑における家族的な要素や雰囲気**の強調**が述べられる。「教

主を父に、摂受院を母に、教団を家族に見立てる」(p.45) アナロジーの意味については、ここでは一旦保留され、後の章で踏み込んだ解釈を試みると述べられている。

また各出来事やキーワードは、続く第3-5章への布石として、霊能・霊能者・「真如霊界」との関連を特に意識して記述されていると思われる。それらは、単に歴史的出来事や用語の説明の記述にとどまるのではなく、レヴィ=ストロース、B・アンダーソン、厚東洋輔、A・シュッツらを援用して、著者の解釈的な記述も付されている。そのような部分も含め、「文体」の創出であり、教えの「外へ」の「リアリティ」の「翻訳」なのであろう。

第3章(pp.165-206)では、霊能者とそのネットワークの計量的な分析がなされる。それは、1991年に行われた質問紙調査(813人中618人から回答)と教団提供のデータに基いている。

まず、霊能者の全体像が明らかにされる。注目すべきは、各人の信仰の段階が進むにつれて、現世利己的な動機は減少し、反対に真如苑の独自の教えに惹かれてという動機が増加していつていることである。著者はこれを、「信仰の深まりとともに…〈略〉…真如苑が与える普遍的、抽象的な救済が求められるようになる」(p.173)と解釈している。

次に、真如苑の発展期、特に70年代の意味が考察される。従来、信者数の増加などから、真如苑の成長は70年頃から始まると考えられていた。だが、霊能者・霊能者予備軍の数の増加、地方への教勢拡大の速さを考えると、「1970年代前半から半ばにかけては停滞に近い低成長の時期であり、77・8年を境に本格的な成長に転じ、80年代にはいって急速に成長した」(p.181)と分析されている。また霊能者の属性の変化と、その要因の一つとしての制度の変遷が述べられ、結果的に霊能者養成システムが教義的・制度的双方で完成したのは、1970年代であることが述べられる。

続いて、入信と布教のネットワークについての考察がなされる。真如苑は、現在も「経」と呼ばれる擬制的な親子関係が信者組織の基本であり、地域別に信者を再編成するといった地区ブロック制を導入していない。そして、「強い紐帯(家族・親戚)」と「弱い紐帯(一次的・二次的関係)」の概念が用いられ、質問紙調査の結果から、「強い紐帯によって新たな信者をリクルートしていた時代は、信者数の伸びがそれほど顕著ではなく、弱い紐帯によって新たな信者が獲得される時代になって急速に成長した」(p.199)という分析がなされる。

第4章(pp.207-232)では、霊能者を目指す霊位向上の取り組みが、計量的に分析される。第3章で用いられた霊能者への質問紙中の自由回答を、コンピュータを用いてコーディングするという工夫がこらされる。用いられた質問項目は、4段階の各霊位を「相承する際にもっとも重要な取り組みは何でしたか」(p.212)というものである。この質問への回答を用いることは、霊位の相承時の取り組みがその人の信仰上の意味ある出来事の多くをカバーすると考えられる点、またほとんどの人が自由回答を記入した点で、有効であると述べられている。

コーディングとは、文の一部の文字列を取り出し、コードをふるることのようである。著者は「AUTOCODE」という、パソコンのプログラムを用いている。まず、文章から意味を考えるとなく文字列を切り出す。これは、「分析者は、意図しないにもかかわらず、目の前のデータを自分の経験や理論的な前提にとらわれて解釈してしまう」可能性があり、「宗教的文脈が十分に理解できないのであれば、逆に宗教的文脈に依存しない方法を考えるのが、一つの解決策」(p.215)

であろうという考えによっている。また、一人が、ある霊位の相承の際の回答に、ある文字列を複数回回答していても、それは1回としてカウントされる。こうしてコーディングを行い、出現度数の少ないもの、無意味なものを除き、490の文字列を選び、意味の似ているものごとによつて、「双親さま」・「両童子さま」・「教え」・「家族」・「おまかせ」・「感謝」などの45のカテゴリーを設けている。次に霊位ごとにコード（≒カテゴリー）間の関連が調べられる。度数の少ないものは省かれ、20の変数が用いられている。その結果、第1段階である大乘においては「双親さま」－「両童子さま」、「教え」－「おまかせ」、「家族」－「感謝」の三組が高い関連を示すことが明らかにされた。次の歓喜では、コード間の関連を信仰の深まりの中にもうまく位置づける解釈ができず、省かれている。続く大歓喜では、大乘で見られた組み合わせの間をつなぐような関連が見える。そして最後に霊能では、新たに「教主さま」、「祈り」、「とらわれのない心」の3つのコードが現れ、さらに多くのコード間に関連が見出されている。まとめると、大乘で見られたバラバラの3つの結びつきが、霊位の向上とともに「教え」ということばを中心に結び付けられていくさまが描き出されているのである（p.224 図4-3）。

次に、関連が深かったコードが「非計量多次元尺度構成法」を用いて分析される。二次元の座標で表すと、垂直軸が「聖－俗」、水平軸が「家族的な共同性一個を越えたところにある一般性」であると解釈されている。そして、「家族的な共同性」に「個を越えたところにある一般性」が、ことばの中に加えられていくことによって信仰が深まっていくと解釈される。

まとめとして、まず大乘に見られる「感謝」・「おまかせ」の観念は、「日本人全体の持つ民俗信仰心」（pp.229-230）として捉えられている。次に、霊能における変数の関連は、「〈教え〉ということばを中心に他のことばが関連づけられている」「訓練を経た信仰者」（p.230）のもので、それは「信仰の深まり」さらには「世界観の変化」（p.230）を意味すると解釈される。最後に、この霊能の関連をもとに、インタビュー調査の結果を分析することが可能となったと述べられる。これは、続く第5章において効果を発揮する。「この世界観、すなわちインタビュー調査の切り口は、教書の熟読や霊能者へのインタビュー、文字で書かれた、あるいは集会での体験談からは直接には見えてこなかった」ものであるとされ、「教義や教団の手を経た体験談とは直接関係なく、それらを前提や予断として持たずに、信者の生の声、直接のことばの中から作り上げた分析枠組みである」（p.231）と独自性が主張されている。

続く第5章（pp.233-297）では、2人の霊能者へのインタビューが、それぞれ異なった方法で分析されている。

1人目は、Aさん（女性）で、1991年に行われた1時間半のインタビューをテキストとしている。ここでは、川端がプログラム開発者の一人である「KT2システム」を用いて、「計量テキスト分析」がなされる。まず、テキストの区切りが行われ、[入信]、[大乘の会座へ]、[霊能相承]などの9つの「階層」に分割される。次にコード（語）の抽出が行われる。これは、処理が一瞬にして行える点、文脈の中で解釈しないために客観的な視点が得られる点で有効であるという。その結果、618のコードが抽出され、度数の少ないものは省かれ、「自分」（94回）を筆頭に29コードに絞られる。その後、テキストデータと出現度数に基づき、区切りの確認とコードの統合が行われる。コードの統合とは、区切りごとの出現度数の多寡が共通している場合にまとめることで、そうしてまとめられたものを「カテゴリー」と呼んでいる。例えば、「自分」と「心」は統合

され、「自己」という「カテゴリー」にされる。そうした結果、【家族】、【自己】、【わかって】、【先祖】などの10カテゴリーが形成される。そして、カテゴリーを横軸、時間・区切りを縦軸にして等高線図というグラフが表され、「信仰史のマップ」(p.245 グラフ5-1)が作成されている。

以降、このマップを頼りに彼女へのインタビューを見ていく。インタビューは彼女の語りのみが提示され、カテゴリーに含まれる語が、ゴシックで示されている。まとめとして、インタビュー中のカテゴリーと第4章でのコードとの関連が述べられ、彼女は「徹底的に〈教え〉に〈おまかせ〉していくことで、霊能を相承した」(p.256)と分析される。そしてその過程で「個を越えた」先祖との力強い一体感を感じ、それは教えにおいて「顕幽一如」として概念化されているものと述べられている。

第5章の後半では、「リアルな生の経験や宗教的経験が、しだいに「体験談」へと構成され、やがて「物語」へと醸成されることの意義と意味を汲みながら」(p.259)、霊能者の霊位向上の物語の分析が企図される。著者は、P・リクルの「三重のミメシス」の議論を持ち出し、真如苑の霊位向上の理解を試みている。こうして、第4章のAUTOCODEプログラムを用いた分析は、「ミメシスI」＝「前＝物語的構造」(p.268)を抽出し、リクルの議論によって理論的な裏打ちが与えられたと述べられる。そして「物語は、時間に関わる行為をめぐる理解モデルとして、今も私たちを深く魅了する大きなパワーを備えている」(p.277)ことが述べられている。

そして次に、2人目の、Bさん(男性)のインタビューが提示される。これは、1990年に行われたものである。彼の入信から霊能相承までの語りがそのまま提示されている。その歩みを見ると、節目ごとに家族をめぐる問題が生じ、それに対する取り組みを通して、霊位向上がなされている。このように〈家族〉と〈感謝〉が執拗に繰り返し現れるのは、それが真如教えにおける「救いの物語の原型であるから」(p.293)だと著者は述べる。また両童子(夭逝した真乗・友司の長男・次男)をめぐる物語こそ、身近な家族を出発点とし、日本人一般の民俗信仰心と矛盾のない構造をもったものである点で、「真如教え」の「原物語」・「ひな形」にふさわしいとされる。そして霊能相承にあたって必要なのは、個別的な救済ではなく、「倫理的で道徳的な人格の陶冶」(p.297)であると論じられている。

「おわりに」(pp.299-305)では、本書で試みたコンピュータ・コーディングによる分析の、物語論によるライフヒストリー研究への位置づけ、即ち計量的分析法と質的データ分析法の融合が論じられた後、なぜ真如苑は成長したのかという問いへの応答がなされる

まず第5章の2人の霊能者の事例と、第4章でのAUTOCODEによる分析とのつき合わせがなされる。その結果、真如苑における霊能とは、端的に言うと、「教え」を中心に「教主さま」・「双親さま」・「両童子さま」・「家族」・「祈り」・「おまかせ」・「とらわれのない心」・「感謝」の9カテゴリーが結びついた「霊能の関連図」(p.224)であるという答えが提出される。また第5章で描き出された「信仰史のマップ」によって、霊位向上の物語を読み解くことが可能になることが確認される。

そして最後に、霊能と教団の発展の関連について、1970年代の霊能者養成のための組織や制度の合理化は、「霊能という元来、業績主義や能力主義になじみにくい領域への、業績主義、能力主義の導入」(p.305)であり、その整備が80年代の真如苑の発展を導いた大きな要因の一つであると述べられ、筆がおかれる。

では次に、評者が感じる本書の特徴と不満な点を述べたい。

本書は1990年からの調査に基くものであることは前述の通りだが、その中間報告は、塩原勉編『宗教行動と社会的ネットワーク』（平成2・3年度科学研究費補助金（総合研究A）研究成果報告書、1992→後、宗教社会学の会編『宗教ネットワーク』（1995）という形で行路社より公刊）においてなされている。本書の第3章のデータ、第5章のライフヒストリーは、この段階ですでに得られていることがわかる（質問紙はその後の回収を待っている）。すなわちフィールドで得たデータをいかに分析の俎上にのせるかに対する苦闘が、本書に行き着く道のりであったのだろう。そしてその課題に対して、川端が、コンピュータによるコーディングを、秋庭が、リクールのミメシスの議論を導入することによって応えたのだといえよう。

真如苑の霊能者のリアリティを描き出したことに関しては、評者は特に異論はない。一つの設定された課題に対して、多角的な接近が試みられたのが、本書の特徴だろう。また真如霊能誕生までの経緯・過程も克明に描かれているといえる。なお、本書では、多くの図表やグラフが用いられており、視覚的にも理解を促している。特に、「霊能の関連図」（p.224）と「信仰史のマップ」（p.245）は大きな独自の成果であり、理解の大きな助けとなるだろう。

本書で、独自性を有しており議論されるべきことは、やはり方法論的な問題であろう。

まずは、本書の方法論上の最大の特徴である、コーディングについて述べたい。第4章・5章では用いられたプログラムは異なるが、まずは文脈に依拠せずに、語の抽出が行われる。その後、出現度数の少ないもの等が省かれた後に、「カテゴリー」というものが設けられる。これは、意味の似通っているコードがまとめられたもの（第4章）・一つの区切りの出現の多寡が共通しているもの（第5章）だとされている。例えば「教え」・「教学」・「御教え」などが「教え」というカテゴリーにまとめられることには、評者としても特に異論はない。しかし、「自分」・「心」が「自己」としてまとめられたり、「周り」・「清らか」・「受け入れ」・「我」・「非を」などが、「とらわれ」としてまとめられている（pp.218-220, pp.323-324注（12））には疑問を感じる。それともそう疑問に思うこと自体がすでに、著者の言う「自分の経験や理論的な前提にとらわれて解釈してしま」っていることなのであろうか。しかし、「区切りごとの出現度数の多寡が共通している」ことが、どうして一つのカテゴリーにまとめられるという判断の根拠になるのだろうか。また「意味の似通っている」という判断は、どのような基準に拠っているのか。もしその段階からは、「真如教え」に触れたという経験上の判断が適用されるのだというのなら、評者は、そこに一種のゲリマンダリングを感じざるをえない。川端は、「コンピュータ・コーディングによる宗教的ライフヒストリーの記述」（『宗教と社会』第7号、2001）論文において、「データからライフヒストリーを構成していく方法については、ブラックボックス化されている部分が大きい」（論文p.135、本書p.234）ことを批判している。その反省をふまえたのが、このコーディング作業であったはずだが、その過程においてグレーの部分が残っているのは不満である。それは、紙幅の都合のために省略ということで了解されるべき事項ではないだろう。

次に、第5章のインタビューに関連して述べたい。まず指摘したいのは、インタビューを取り巻くデータが極端に少ないことである。どのくらいの時間聞いたのか（Bさん）、どのような場・状況で聞いたのか、何を聞いたのか、話を聞いたのは1回だけなのか、他の霊能者に聞いていないのか、なぜその2人のみが事例として選ばれているのか、など記述する必要があったであろう

データは多い。特に、著者は霊能者の「リアリティ」を内から外へ「翻訳」することを企図しているが、霊能者は教団「内」の者として、自分の経験をインタビュアーという「外」に語っていると考えられるので、関係性や役割の問題はもっと丁寧に論じられてしかるべきであろう。後に述べることも関連しているが、例えば、インタビュアーとインタビューの関係性の問題、相互行為論的な状況をめぐる問題、あるいはインタビューを重ねるにつれて一貫して語られる内容と変遷をたどる内容があるといったライフヒストリーの信頼性の問題などの、社会学における近年のインタビューやライフヒストリー法に関する成果との関連が、本書には薄い印象を与える。この問題は、「個人の人生の理解を企図したものではない」・「霊能の関連図とのつき合わせこそが重要」といった説明では解決できていない点だと評者は感じる。これが第2の不满な点である。

最後に、他の研究との接続に関して述べたい。まず本書において、真如苑は「新宗教」（あるいは「在家仏教教団）」という言葉では表されていない。また研究史の概括においても、真如苑を扱った研究は検討されているが、新宗教の展開過程や、教団内関係者（のリアリティ）を扱った研究は、森岡清美の立正佼成会の研究を除いて、ほとんど触れられていない。また、前述のようにライフヒストリー研究や、あるいは「内在的理解」に関する研究のレビューも十分になされたとは考えにくい。また本書で明らかになっていない点や、今後の課題等も述べられていない。そういった点で、研究対象を総体的に扱っていることもあり、様々に交錯する研究史のどこに本書を位置づけることができるのかが明確ではない。著者が、種々の読者の「読み」に耐える「濃密」で「開かれた」記述を目指したこの研究成果が、研究史上いくぶん「閉じられた」ものである印象を抱かせるのではないかと、危惧せざるをえない。

以上、何点か解決されるべき疑問点があるとは思われるものの、本書が、一つの宗教教団を総体的に扱った力作であり、宗教を社会学的に扱う際の方法論上の可能性を鋭く問うた著作であることは間違いないであろう。今後これに続く研究成果の提出が待たれるところである。